

|               |   |
|---------------|---|
| Title         | 英語の遂行副詞と文副詞について   |
| Author(s)     | 舟阪, 晃   |
| Citation      | 大阪外国語大学学報. 42 p.29-p.48   |
| Issue Date    | 1978-03-15  |
| oaire:version | VoR   |
| URL           | <a href="https://hdl.handle.net/11094/80710">https://hdl.handle.net/11094/80710</a> |
| rights        |   |
| Note          |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 英語の遂行副詞と文副詞について

舟 阪 晃

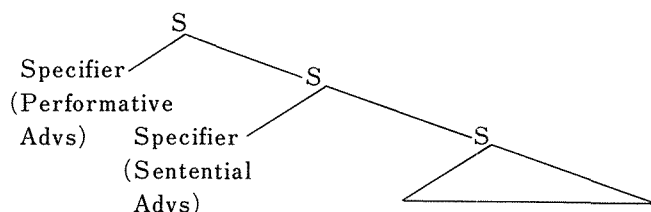
## Performative and Sentential Adverbials of English

Akira FUNASAKA

The aims of this paper are (i) to reveal the characteristics of performative and sentential adverbials of English and (ii) to specify the constraints on occurrence of these adverbials on the surface level.

Our conclusions are :

(i) These two adverbials are arranged in the hierarchy of specifiers as below :



(ii) Performative adverbials have been examined in reference to their constraints of occurrence with declarative, interrogative and imperative sentences. Schreiber's underlying structure for them has been improved.

(iii) Sentential adverbials have been subcategorized as below, based on their syntactic and semantic characteristics.

|                 |   |              |   |                  |
|-----------------|---|--------------|---|------------------|
| Sentential advs | { | Factive advs | { | Happily-type     |
|                 |   |              |   | Fortunately-type |
|                 |   |              |   | Wisely-type      |
|                 |   | Modal advs   | { | Evidently-type   |
|                 |   |              |   | Probably-type    |

0. 本稿の目的は、英語の遂行副詞 (Performative Adverbials) と文副詞 ( Sentential Adverbials) について、(i) 共起制限の面からそれらの特徴を明らかにし、(ii) 表層面における生起上の規制を論ずることである。

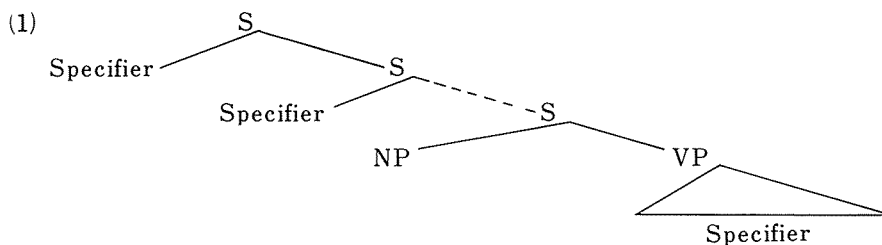
1. 副詞については、その基本的概念、分類、用語等が人によりまちまちであるので、本稿では

拙稿 (1977a, 1977b) の議論を踏まえて話を進めることにする。まず、拙稿 (1977a) では、つぎの点が明らかにされた。

(a) 副詞 (adverbials) は、変形で生成されるのではなく、深層に存在するものとする。その結果、副詞と他の構成要素との間の共起制限が記述できる。

(b) 副詞は指定辞 (Specifier) としての機能を持ち、動詞、副詞、形容詞、文などを指定する。また、発話様式も指定辞の中に入り、副詞と同じ線上で扱われる。

(c) 指定辞は、(1)のように階層をなし、副詞はS節点に支配されるもの (S-specifier) と、VP節点に支配されるもの (VP-specifier) とに二大別される。



(d) いわゆる文副詞について予備的な調査を行ない、その中にいくつかの階層があることを示唆した。

また、拙稿 (1977b) ではつぎの点が明らかにされた。

(e) 共起上のちがいに注目することにより、英語の時副詞と場所副詞の階層上のちがいが指摘された。文指定辞としての時副詞と場所副詞の場合、前者が後者より指定辞階層の上位を占める。

(f) 深層における上下のちがいは表層における副詞の位置に反映され、階層の上の副詞程、表層の外位置を占めやすい。表層の外位置・内位置は相対的に決まるのであるが、(2)の x の位置は外位置の典型的なものである。

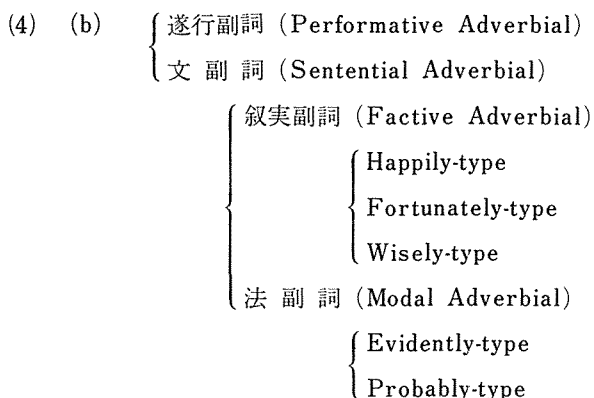
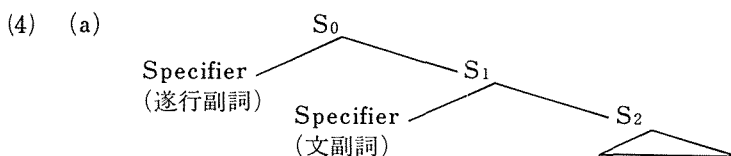
- (2) (i) [S, x]s  
 (ii) [x, S]s  
 (iii) [..., x, ...]s

(2 i) (2 ii) の場合、コンマがある方がないものより外位置を示す。<sup>①</sup> また、下位の S の中にも外位置・内位置の相対的な区別が存在する。

(g) 表層における時副詞と場所副詞の分布は(3)のようになり、文頭と文尾との対称的な配列がみられる。

- (3) [time place ..... place time]s

以上が、これまでにした議論のうち本稿に関係のある部分の要約であるが、本稿では、(d) のところでのべた「文副詞」について詳しく検討していきたいと思う。扱う副詞の範囲、種類は(4)のようなものである。



本稿で扱う両副詞は、(4a) のように、S<sub>2</sub> の上位にあるので、原則として、S<sub>2</sub> の構成要素とは共起制限を持たないか、持つとしても非常に制限された形でのみ持つ。とくに、S<sub>2</sub> 内の動詞や否定の作用域とはまったく関係なしに生起する。

次節以降の議論で、(4b) の下位区分を支持する根拠を上げていくわけであるが、実際に扱う副詞は A-ly の形のものが中心で、“Adverbial” という用語が示すものより狭い範囲を問題にしているので、この点を明記しておきたい。

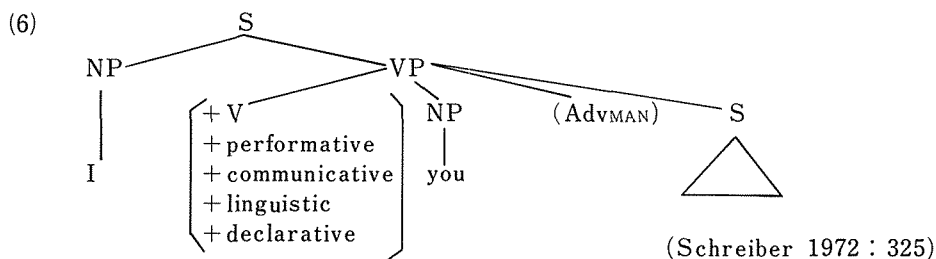
## 2. 遂行副詞 (Performative Adverbial)

### 2. 1 遂行副詞と遂行分析 (Performative Analysis)

遂行副詞は Schreiber (1972) の style disjuncts にあたるもので、話者の話し方を表わす副詞である。(5)の例で明らかなように、Jackendoff (1972) の speaker-oriented adverb とは性質が異なるので区別する必要がある。

(5) Frankly, John is a genius.

この種の副詞については、すでに Schreiber が、Ross (1969) の遂行分析に基づいて、(6) のような基底構造を提案した。



(6)はつぎの点で評価できる。まず第一に、遂行副詞——(6)では様態副詞——の主体が話者 [I] で、聞き手 [you] が存在することが明示的に示されている。第二に、遂行動詞の素性 [+performative] により、遂行副詞に内在する時制が現在であることが明らかにされる。第三に、遂行副詞と下位の S とは姉妹関係にあるので、遂行副詞と下位の S の中の構成要素との間には共起制限がないことがわかる。たとえば、(5)の文について、下位の S は肯定でも否定でもよいし、また、動詞の時制も現在形でも過去形でもよい。また逆に、*Frankly* が下位の S の構成要素と共起するとしたら、さらに、この副詞が様態副詞であるとしたら、(5)は非文法的になるはずである。というのは、様態副詞と be 動詞とは共起しないからである。ところが、(5)は文法的な文であるから、*Frankly* は下位の S には支配されていないといえる。第四に、遂行副詞を様態副詞と考えることによって、より一般的な記述ができることになる。第五に、(7)が不可であるということは遂行動詞との関係でよく説明できる。つまり、(7a) は遂行自体の否定につながり、(6)から不可となる。また、(7b) も、遂行行為に「程度」がないことから、非文法的であることがわかる。

- (7) (a) \* Not frankly, John is a genius.  
 (b) \* More frankly, John is a genius. [A, B] ②

以上のように、遂行副詞を Ross の遂行分析の枠で扱うといろいろプラスの点が多いのであるが、同時に、以下のような問題点もある。第一に、Ross の遂行分析の提案のときからすでに気になっていたことであるが、遂行削除 (Performative deletion) は非常に乱暴な変形であるということである。つまり、遂行削除では、簡単な標記のしかたをすれば、I SAY TO YOU が削除されることになるが、(6)で明らかのように、これらは全体として一つの構成要素を構成していないのであるから、構成要素でないものを削除していることになる。同じことが遂行副詞の場合にもいえるわけである。つまり、(6)から(5)を派生するためには構成要素でないものを削除する必要がある。ところが、通例、変形で削除されるのは構成要素のみであるとされている。一方、これに対して、I SAY TO YOU を一度に削除せずに、[I] [SAY] [TO YOU] をそれぞれ別々に削除するとしたら、これは構成要素を削除したことになり、この限りにおいて問題はないが、今度は、その削除の引き金になる要因がないのに削除が起っているという別の問題が生じる。つまり、同一の構成要素が二つ以上あり、一方を根拠に他方を削除するというのなら、ごくふつうの変形であるが、引き金のない変形は特異な変形ということになる。このような点から、遂行分析はそれ自体非常に有力なものであると思うが、遂行削除については一考が必要である。

第二に、遂行副詞を様態副詞と考えると、そうでないよりは一般的な説明がえられるが、同時に、資料面で不都合が生じる。両者の間に一対一の対応関係があればまったく問題はない。また、そのような関係がなくとも、大きい集合をなす様態副詞が、小さい集合である遂行副詞をすべて含んでおれば、これも処理できないことはない。ところが実際は一方の集合には入るが他の集合には入らない表現が存在するわけで、単純に両者を同一の節点で扱うことはできない。たとえば、*slowly*, *carefully* は様態副詞に入ると思われるが、これらが遂行副詞になることはない。しかし、こ 場

合は様態副詞の方がより大きい集合であるのでまだよい、が、*first, in conclusion, to begin with* (Sadock 1974 : 36) ; *to quote the Times* (Huang 1975 : 29) ; *in my opinion, in all probability* (Jackendoff 1972 : 92)<sup>③</sup>などは様態副詞には入らないが、遂行副詞には入る可能性がある。この場合は、より小さい集合がより大きい集合に含まれないということになる。このように考えてくると、資料面の事実を正しく説明するために、様態副詞のほかに、遂行副詞という範疇が必要であると思われる。

第三に、(8)を検討してみよう。

- (8) (a) Frankly, John is a genius.  
 (b) Frankly speaking, John is a genius.  
 (c) \*Speaking, John is a genius.

(8a) は(6)に遂行削除をかけたもので、遂行削除を Schreiber のような方式でよいとするならば一応説明はできる。ところが、(8b) は説明できない。なぜなら、(6) から (8b) を派生するためには、[I] と [TO YOU] を削除し、[SAY] のみを残す変形をかける必要があるが、このような変形は存在しない。つまり、遂行削除の場合は I SAY TO YOU が全体として削除されるわけで [SAY] だけが残るということは許されない。一方、[I] [SAY] [TO YOU] という分析をし、[I] と [TO YOU] を削除したとしたら、すでにのべたごとく、特異な変形を認めたことになる。また、(8b) は容易できるのに (8c) は不可であるという事実があるが、(6)ではこの点が説明できない。それではどのような基底構造ならよいかという問題が生じるが、それについては2. 4で論ずる。

## 2. 2 遂行副詞と疑問文との共起について

一般的にいて、遂行副詞と疑問文とは、wh 疑問や yes-no 疑問にかかわりなく、共起できる。この点で、遂行副詞は本稿で扱う他の副詞と違っている。しかし、(5)のような平叙文と共起するときよりも複雑な関係がみられる。

- (9)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Seriously} \\ \text{Frankly} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{did you like the book?} \\ \text{when will you leave?} \end{array} \right\}$  (Schreiber 1972 : 330)

Schreiber によれば、*seriously* の場合、(10)の解釈のみが、また、*frankly* の場合、(11a) (11b) の解釈が可能であるという。

- (10) I ask you seriously if you did like the book.  
 (11) (a) I ask you frankly if you did like the book.  
 (b) I ask you that you tell me frankly if you did like the book.

(Schreiber 1972 : 332)

もしこの解釈が正しいなら、遂行副詞と疑問文とが共起するときには、副詞によってはあいまい性が生じることがあるといえる。あいまいな場合は(11)のような解釈になるのであるが、(11a) の方では *frankly* は遂行副詞、(11b) の方ではな態副詞であって遂行副詞ではない。なぜなら、(11b) の

(12) Seriously  
Confidentially  
Specifically  
? Truthfully  
? Honestly  
? Frankly  
?? Candidly (Schreiber 1972 : 332)

遂行副詞は最上位のSに支配される副詞であるので、最下位のSの内部の構成要素とは共起制限をもたないのであるが、(13)のような事実もある。

- (13a) が非文法的で、(13b) が文法的であるという事実は (14a) (14b) の事実にそれぞれ対応している。

- (14a) から明らかなように、この文では、話者が聞き手に話者自身のこと、とくに “eager” でわかるごとく、話者自身の心理状況を尋ねているわけであるから、特別の文脈を作り出さないかぎり容認できない文となる。それに対し、(14b) の方は、埋め込み文の主語が話者とは違うので可能な文といえる。しかし、解釈によっては、(14b) もやや奇妙という判定が下されるかもしれないが、(14a) と比較すれば、はるかによい文といえよう。もし (14b) の John is が you are なら、その方がさらに正常な文ということになる。とにかく、このような事実は(14)のような遂行構造を仮定することによってより明示的に説明される。

(15) \*Not  $\left\{ \begin{array}{l} \text{truthfully} \\ \text{confidentially} \\ \text{honestly} \end{array} \right\}$ , did Sam reject the analysis? (Schreiber 1972 : 334)

## 2. 3 遂行副詞と命令文との共起について

遂行副詞と肯定の命令文とは、(16)にみられるごとく、共起しない。このことは、(17)が同じく不可であることから、自動的に説明できる。

(16) \*Frankly, sign orders for tapping! [A, B]

(17) \*I ORDER YOU frankly to sign orders for tapping.

本来、命令文というのは話者が聞き手に対し直接何らかの行為をうながすものである。一方、遂行副詞の機能は遂行動詞に何らかの制限を加えたり、修飾したりすることであるので、命令文に遂行副詞がつけば、それだけ命令の直接性は弱められるといえる。いいかえれば、命令の *illocution force* が減じるということになる。したがって、遂行副詞が命令文と共起しないのは当然である。

ところが、Schreiber のいう勧告（命令）文（hortative imperative）の場合は、(18)のごとく、共起が認められる。

(18)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Frankly} \\ \text{Candidly} \\ \text{Confidentially} \\ \text{Honestly} \\ \text{? Truthfully} \end{array} \right\}, \text{ be glad that we're leaving.}$   
(Schreiber 1972 : 340-42)

つまり、この場合は、一応命令文とはいえるものの「命令文らしさ」が非常に弱く、命令文の直接性は少ないといえる。したがって、遂行動詞としては ORDER ではなく、SUGGEST, ADVISE などが考えられる。観点を変えれば、(18)は命令文ではなく、平叙文の一種であるということもできよう。

つぎに問題になるのは遂行動詞と否定命令との関係である。両者が共起できることは、すでに拙稿（1977a : 106-108）で指摘済みであるが、その説明はできないままでおわっていた。その時の例文を(19)としてくり返しておこう。

(19) Frankly, don't sign orders for tapping! [A, B]

(19)については、今回あらためて informant B に尋ねたのであるが反応は同じであった。さらに、今回は、(20)も使い調べたのであるがやはり同じ結果であった。

(20) (a) \*Frankly, sign orders for cease-fire!

(b) Frankly, don't sign orders for cease-fire! [B]

さらに、informant B に、(19)をどのように解釈しているかを尋ねたところ、(21)のような答がえられた。

(21) If you ask me for an advice I advise you frankly, "Don't sign orders for tapping." [B]

(21)から明らかなように、否定の命令は「弱い」命令文に解釈されている。したがって、勧告（命令）文の場合と同じく、遂行動詞としては SUGGEST や ADVISE が考えられる。結論として、典型





- (25) (a) I tell you frankly that John is a genius.  
 (b) Frankly, John is a genius.  
 (c) John is a genius.  
 (d) Frankly speaking, John is a genius.  
 (e) \*Speaking, John is a genius.

まず、(25a) は S<sub>2</sub> を根拠に S<sub>3</sub> を削除すると生じる。(25b) は、(25a) と同じ手順を踏んだ後、S<sub>2</sub> が遂行削除により削除されると生じる。この遂行削除は構成要素の削除であるので Schreiber のそれとは性質が異なる。(25c) では、Specifier 2 が選択されていない。S<sub>2</sub> に遂行削除が適用され、その結果生じる。(25d) は、S<sub>2</sub> の [I] [TO YOU] [S<sub>1</sub>] を根拠にし、S<sub>3</sub> における同じ構成要素を削除し、その後、S<sub>2</sub> を、まとめて、遂行削除で削除すると派生される。(25e) の場合は、Specifier 2 は選択されていない。したがって、S<sub>2</sub> は遂行削除により全体が削除されねばならない。しかし、(25e) では [SAY] の部分だけが残っているわけで非文法的ということになる。逆にいえば、S<sub>2</sub> 中の [I] [TO YOU] は削除する引き金がないのに削除されているので非文法的な文が生じたといえる。以上のように(24)のような構造を仮定すると(25)はすべて説明できることになる。Schreiber の構造——本稿の(6)——では、すでに指摘したごとく、遂行削除自体に問題があり、さらに、(25d) (25e) は説明が不可能であると思われる。

## 2. 5 遂行副詞の表層における生起上の制約

- (26) (a) Frankly, John is eager to sign orders for tapping.  
 (b) John is eager to sign orders for tapping, frankly.  
 (c) John, frankly, is eager to sign orders for tapping.  
 (d) \*John frankly is eager to sign orders for tapping. [C]

(26) は Informant C の反応であるが、(26a) (26b) とともに問題はなかった。(26c) (26d) はコンマの有無によって判定が異なるが、このことは Schreiber (1972 : 326) によっても支持されている。ただし、Huang (1975 : 80) ではコンマなしでもよいとしているが少数意見であると思われる。

- (27) (a) It is, frankly, unfair to many people. (Greenbaum 1969 : 86)  
 (b) \*Mervin is a, frankly, genius. (Schreiber 1972 : 326)  
 (c) \*John signs, frankly, orders for tapping.

(27a) のように be 動詞の後に生じる例はまれであるが不可能ではない。この場合はコンマが必要である。下位の S の中でも前後にコンマをつけられれば遂行副詞は生じることができるとかなり強い規制が働いている。(27b) (27c) は、遂行副詞に限らずすべての副詞に対する規制と考えられる。また、遂行副詞が中核文の最後——様態副詞のふつうの位置——に生じたときは、様態副詞としての解釈が優先するので、この位置は遂行副詞の位置ではない。

埋め込み文の中に生じる場合はつぎのような制約がある。

- (28) (a) \*Sam  $\left\{ \begin{array}{c} \text{admitted} \\ \text{noted} \\ \text{discovered} \end{array} \right\}$  that  $\left\{ \begin{array}{c} \text{candidly} \\ \text{bluntly} \\ \text{confidentially} \end{array} \right\}$  the dodo is extinct.  
 (b) \*The girl who frankly is a doll is leaving.  
 (c) Ramona, who frankly is a doll, is leaving. (Schreiber 1972 : 327)  
 (d) John said, "Frankly, Mike is a genius."

(28)から明らかなように、遂行副詞は Root をなす S にのみ生じるといえる。Root というのは、Emonds (1970) によれば、(i) 樹状図の一番上の S、(ii) 一番上の S に直接支配されている S、(iii) 直接話法の伝達される内容をあらわす S (Emonds 1970 : 6)、である。(i) は単文、(ii) は (28c) の例、(iii) は (28d) がそれぞれあたり、(28a) (28b) は Root をなさない S の中に遂行副詞が生じているので不可となっている。以上のように、Root の中には生じるのであるが、まったく自由にどこにでも生じるわけではないので、(26) (27) の制約にも注目する必要がある。簡単に要約すれば、遂行副詞は、(3)の階層の一番上位の S に支配されているのであるから、表層の線状構造においてはできるだけ「外位置」を占めようとする傾向をもつ。構造内の内外関係については拙稿 (1977b) で言及したのであるが、中核文を考えた場合、文頭や文尾はそれ以外の場所より外位置であるといえる。さらに、中核文の前後にコンマをおいてその外側に構成要素をおけば、その位置は中核文の中のどの位置よりも外位置であるといえる。また、中核文の中でも、何らかの構成要素を挿入し、とくに、その前後にコンマをおいた場合、その位置は中核文のどの位置よりも外位置であるといえる。このように「外位置」というのは相対的に決まるものであるが、遂行副詞はできるだけ外位置を占めようとする副詞である。

### 3. 文副詞について

文副詞は、(4a) で明らかなように、遂行副詞の下、下位の S の上にその位置を占めている。本稿で扱う文副詞は (4b) で示したものだけである。

つぎに、文副詞に共通の特徴を上げておこう。

(i) 文副詞は S に支配されるが、遂行副詞より下位の位置を占める。したがって、表層においても、(29)のごとく、遂行副詞よりは内側の位置を占める。とくに、遂行副詞と文副詞が共存するときはこのことが明らかになる。一方、最下位の S の上位・外側にあるから、最下位の S 内の構成要素とは共起制限がまったくないか、ごく限られた形でのみ制限がある。副詞が指定する S の中に NEG がある場合は、(30)のように、文副詞は否定の作用域には生じない。

- (29) (a) Frankly, John obviously signed orders for tapping.  
 (b) \*Obviously, John frankly signed orders for tapping.  
 (30) (a) \*He was not fortunately sick. (Hunng 1975 : 71)  
 (b) Fortunately he was not sick.

(ii) 文副詞の第二の特徴は、文副詞は、それが直接指定する S 構造の中に Q 形態がある場合は

生起しないということである。実例をいくつか上げておこう。

- (31) \*  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Happily} \\ \text{Probably} \\ \text{Certainly} \\ \text{Wisely} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{is John eager to sign orders for tapping?} \\ \text{did John sign orders for tapping?} \\ \text{who signed orders for tapping?} \end{array} \right\} \quad [A]$
- (32) (a) \*Did Frank probably beat all his opponents?  
 (b) \*Who certainly finished eating dinner? (以上二例 Jackendoff 1972: 84)  
 (c) \*Do the anarchists,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{fortunately} \\ \text{obviously} \end{array} \right\}$ , have any organization? (David 1975: 161)  
 (d) \*Did John wisely not go to the party?  
 (e) \*Was surprisingly Mary a typist? (以上二例 Huang 1975: 49)
- (33) ? What has Charley evidently discovered? (Jackendoff 1972: 84)
- (34) (a) ?  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Conceivably} \\ \text{Possibly} \end{array} \right\}$ , will they have enough spare cash?  
 (b) ?Will they  $\left\{ \begin{array}{l} \text{conceivably} \\ \text{possibly} \end{array} \right\}$  have enough spare cash (以上二例 Corum 1974: 91)
- (35) (a) \*Nekane asked  $\left\{ \begin{array}{l} \text{whether} \\ \text{if} \end{array} \right\}$  certainly the terrorists had been arrested. (Corum 1974: 92)  
 (b) \*?I have to ask if,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{probably} \\ \text{obviously} \end{array} \right\}$ , S. (David 1975: 162)
- (36) (a) May I say that, obviously, S?  
 (b) Can I tell you that S,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{obviously} \\ \text{fortunately} \end{array} \right\}$ , if S? (David 1975: 162)

(31)は informant A の反応に基づいているが、(31)に一致する資料が多くの文献にみられる。(32)は文副詞が文中に出た例であるが、(31)と同じことがいえる。(33)は完全に非文法的であるとはいえない。したがって、(32b)よりは容認される度合いが大きいといえる。しかし、筆者が調べた文献・資料の中で(33)一例だけである点から一般的な事実ではないと思われる。さらに、かなり「内位置」を占めていることから文副詞以外の解釈が生じている可能性もある。(34)も同じく、不可になるはずであるが、完全に非文法的であるとはいえない。この場合は、話者の判断が副詞の中に投影されているのではないと思われる。さらに、実例が少ないという点も注意する必要がある。(35)は、文副詞が直接指定する S の中に Q 形態素がある例であり、(36)は、Q 形態素と文副詞とが直接には接触していない例である。以上の資料から、文副詞は、遂行副詞とはちがって、直接指定する S の中に Q 形態素がある場合は生起しないといえる。

(iii) 文副詞の三番目の特徴は、文副詞は、直接指定する S の中に IMP 形態素がある場合は、生起しないということである。

(37) \*  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Happily} \\ \text{Certainly} \\ \text{Probably} \\ \text{Fortunately} \end{array} \right\}$ , (don't) sign orders for tapping! [A]

(38) \*Get,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{fortunately} \\ \text{obviously} \end{array} \right\}$ , an organization, you silly, misguided boy. (David 1975 : 161)

(39) Allow me to say that, obviously, S. (David 1975 : 192)

(37)の事実に一致する資料は他にも多くみられる。否定命令、肯定命令のちがいにいかかわらず(37)は不可である点、遂行副詞との比較において注意されるべきである。(38)では文中に文副詞が生じているが、結果は同じである。(39)の場合、上位の S の中には IMP 形態素があるが、*obviously* が直接指定する S の中には IMP はないので文法的な文となる。

(iv) 文副詞の最後の特徴は、(40)のような文の副詞の位置に自由に生じることである。

(40) It is  $\left\{ \begin{array}{l} \text{evidently} \\ \text{fortunately} \\ \text{probably} \\ \text{happily} \\ \text{surprisingly} \\ \text{etc.} \end{array} \right\}$  true that the uprising frightened the burghers. [C, D]

以上が文副詞の共通の特徴である。本稿で扱われる文副詞は、叙実副詞 (Factive Adverbials) と法副詞 (Modal Adverbials) に限られる。まず、叙実副詞から検討していこう。

### 3. 1 叙実副詞 (Factive Adverbial)

叙実副詞は、指定する S の内容の真実性が話者によって前提されている。Jackendoff の話者指向副詞 (speaker-oriented adverbials) と類似しているが、まったく同じではない。この副詞の特徴は、Kiparsky-Kiparsky (1970) の用語でいえば、[+factive : +emotive] と要約できる。叙実副詞にはつぎの三つの下位分類が可能であろう。

(i) Happily-type : 指定する S に対する話者の心理状態を表わす。

(ii) Fortunately-type : 指定する S 全体に対する話者の判断・評価を表わす。

(iii) Wisely-type : 指定する S の中の主語の行為についての話者の評価、とくに主語との関連を強調した評価を表わす。

#### 3. 1. 1 Happily-type — (un-) happily, (un-) luckily, etc.

(41) (a) Happily, Frank is avoiding us.

= I am happy that Frank is avoiding us. (Jackendoff 1972 : 69)

- (b) Unhappily, he ate a lot.

=  $\left\{ \begin{array}{l} \text{I am} \\ \text{One is} \end{array} \right\} \text{unhappy that he should have eaten a lot.}$   
(Greenbaum 1969 : 98-99)

(41a) (41b) から、この type の副詞は話者の心理状態を表わし、下位の S の主語とは共起しないことがわかる。つまり、(41a) において、“Frank is happy” という含意はまったくない。

- (42) (a) \*That the uprising frightened the burghers is happy.

- (b) \*The uprising frightened the burghers, it's happy.

- (c) ? The uprising frightened the burghers, happily [D, E]

- (43) (a) \*Not happily, the uprising frightened the burghers.

- (b) More happily, the uprising frightened the burghers. [D, E]

(42a) (42b) は容認できない文である。(42c) は完全に非文法的というわけではないが自然でない。*happily* は本来話者と関係の深い副詞であるので、話者の関心を多く受けている要素が通例おかれる文頭ないし文頭に近い位置におかれる方が自然である。また、(43)からわかるように、この副詞自体を否定することはできないが、程度の多少は認められる。

3. 1. 2 Fortunately-type — (un-) fortunately, surprisingly, interestingly, regrettably, erroneously, etc.

- (44) (a) Surprisingly, he is ill.

= It is surprising (to me) that he is ill. (Huang 1975 : 29)

- (b) Surprisingly, he ate a lot.

“It is surprising that he should  $\left\{ \begin{array}{l} \text{have eaten} \\ \text{eat} \end{array} \right\} \text{a lot.}$ ”  
(Greenbaum 1969 : 98)

Happily-type では話者の心理状態が最大の関心事であったが、Fortunately-type では “S is A” が中心のテーマで、それに対して話者の判断・評価が付加されている。(44)と(41)を比較するとその事実が明らかになる。

- (45) (a) That the uprising frightened the burghers is unfortunate.

- (b) \*The uprising frightened the burghers, it's unfortunate.

- (c) The uprising frightened the burghers, unfortunately. [D, E]

- (46) (a) Not fortunately, the uprising frightened the burghers.

- (b) More fortunately, the uprising frightened the burghers. [D, E]

(45a) は文法的であるが、happily-type ではこの構造は容認されない。(45b) は happily-type と同じく、非文法的である。(45c) は文法的である。この点は、happily-type の (42c) と比較してみることが必要である。happily-type は話者の心理状態を表わす副詞であり、文頭が一番よい位置であるが、fortunately-type では、話者は関与することはするが、happily-type ほど直接的な関与のしかたではない。このため、(42c) より (45c) の方が容認性は高くなるものと思われる。(46)については、(a)

(b) とともに文法的で、happily-type とちがった特徴をみせている。

- (47) (a) \*Sam  $\left\{ \begin{array}{l} \text{admitted} \\ \text{noted} \\ \text{discovered} \end{array} \right\}$  that unfortunately the dodo is extinct.  
(Schreiber 1972 : 326)

(b) ? John doesn't care that unfortunately the dodo is extinct. [D, E]

(c) John reported that unfortunately the dodo was extinct. [D, E]

(d) \*I wonder whether he fortunately knew the answer.

(Schreiber 1971 : 88)

(47)は埋め込み文の中に fortunately-type の副詞が生じた例であるが、(47a) (47b) から、副詞が指定している S が前提を表わしている場合には、不可になることがわかる。また、(47d) のように、副詞が指定している S の中に Q 形態素があると容認できない文が生じる。(47c) が文法的なのは、that 節の内容が前提されているのではなく、主張されているためであろうと思われる。これらの特徴はすべての文副詞に共通のものである。

最後に、Lehrer (1975) の補文指向副詞 (Complement-oriented adverbs) に言及しておきたい。Lehrer は(48)の文を上げ、これは(49)で表わされるような構造を持つという。

(48) John falsely believes that Bill is a thief.

(49) BELIEVE (John, P) & False (P) (Lehrer 1975 : 489f)

しかし、筆者の考え方からすれば、(49)の形式化は不十分で、事実を正確に記述していないといえる。まず第一に False (P) —— P は補文 —— という判断をした主体が明示的に出ていないことが指摘できる。その主体が John でないことはいうまでもない。第二に、補文 P の内容について False だという判断を下していることになるが、実際は、“(John) believes that Bill is a thief.” という全体に関して False だと判定しているといえる。以上の考察から、Lehrer の補文指向副詞は筆者の fortunately-type の副詞に入るものと思われる。

### 3. 1. 3 Wisely-type —— (un-) wisely, bravely, foolishly, stupidly, etc.

(50) John bravely fought in Spain.

= It was brave of John to have fought in Spain. (Richards 1976 : 344)

Wisely-type は(50)のような書きかえを許すような副詞である。もちろん叙実副詞の一つであるので(50)の背後には “John fought in Spain” が前提されている。そして、その行為を “bravely” と判定したのは John ではなく話者である。話者が背後にいるということは、(51)のような話者自身が主語になっている文が非文法的になったり、不自然になったりすることからわかる。

(51) (a) \*Wisely, I resign from this position.

(b) ?? Stupidly, I accept your terms. (以上二例 Michell 1974 : 444)

つぎに、前二者と同じ枠を用いて wisely-type の動きを調べてみよう。

(52) (a) \*That Mike resigned from the position is wise.

- (b) \*Mike resigned from the position, it's wise.  
 (c) ? Mike resigned from the position, wisely. [D, E]  
 (53) (a) ? Not wisely, Mike resigned from the position.  
 (b) More wisely, Mike resigned from the position. [D, E]

(52)(53)とも happily-type と同じパターンを示しているが、つぎの点でちがっている。つまり、wisely-type は話者の判定・評価を表わしているが、happily-type は話者の心理状態を表わしている。いいかえれば、wisely-type では、話者が“Subject is wise ....”と判定し、happily-type では“Speaker is happy ....”という状態を表わしている。

さらに、二、三の注意すべき点を上げておこう。

- (54) \*  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Stupidly} \\ \text{Foolishly} \\ \text{Wisely} \end{array} \right\}$ , John is tall. (Corum 1974: 94)

(54)は述部が[ $-\text{controllable}$ ]であるために不可になったものと思われる。この種の副詞は話者が主語の行為を評価するわけであるから、本来評価の対象にならない[ $-\text{controllable}$ ]な項目とは共起しないはずである。

- (55) (a) Sam cleverly has shoveled the dirt into the hole.  
 (b) ? \*The dirt cleverly has been shoveled into the hole by Sam.

(以上二例 Jackendoff 1972: 105)

(55)は主語が有生の行為者でなければならないということを示している。話者が評価の対象にするのは有生の行為者の行為であるといえる。この点は、happily-type とともに fortunately-type と異なる。

以上、叙実副詞の三つの type(s) をみてきたのであるが、それぞれは互いに対立的な特徴を持っているので、このような下位分類は妥当なものであると思われる。

### 3. 1. 4 叙実副詞の表層における生起上の制約

三つの叙実副詞はつぎのような生起上のパターンを示している。

- (56)  $\text{---}, \text{NP} \text{---} \text{Aux} \text{---} \text{VP (NP)} \text{---} \text{X} \text{---}, \text{---}$
- |                  |   |   |    |  |   |    |
|------------------|---|---|----|--|---|----|
| happily-type     | ○ |   |    |  | * | ?  |
| fortunately-type | ○ | ○ | ○? |  | * | ○  |
| wisely-type      | ○ | ○ |    |  | ? | ○? |

話者に関係する副詞のふつうの位置は文頭、NP-Aux 間、文尾などであるが、happily-type は文頭の位置に分布が限られている。これは、話者との結びつきが強いことを示しているであろう。Fortunately-type は Aux-V 間にも生じるが、NEG が先行するときはこの位置では不可となる。また、文尾で生じてもよい。このことから、Fortunately-type は拘束される度合の小さい副詞であるといえる。話者との関係が直接的でないということと関係があるものと思われる。V(NP)-X



間は VP 副詞 —— たとえば様態副詞 —— の「指定席」であるので、この位置に文副詞が生じたときは、(57)のように VP 副詞としての解釈が与えられる。解釈がつかないときは、もちろん非文法的文となる。

(57) (a) John fought bravely in Spain.

(b) John voted wisely in the election. (以上二例 Richards 1976 : 344)

X の後の位置については (58)(59) のような事実がある。

(58) ? John stayed in Berkeley foolishly. (Huang 1975 : 82)

(59) John voted in the election wisely.

= Wisely, John voted in the election. (Richards 1976 : 344)

(58) の場合、foolishly は中核文の外にある副詞と解釈される可能性が強いが、同時に、VP 副詞としての解釈も不可能ではないので上記のような判定になったと思われる。(59) の場合は文副詞の解釈のみを上げているが、(58) のようなあいまい性があるものと考えられる。

### 3. 2 法副詞 (Modal Adverbial)

この type の副詞の特徴は副詞が指定する S が [-factive] である点である。したがって、S の真実性は主張されるのであって、前提されているのではない。主張のしかたにより二つの下位分類が可能である。一つは絶対的な主張で、他方は相対的な主張である。

#### 3. 2. 1 Evidently-type —— evidently, certainly, clearly, obviously, etc.

この type の副詞は絶対的な主張を示すもので、原則として程度の違いは認められない。主張の主体は、(60) のように、話者のこともあるし、もづと一般的に不特定の人のこともある。さらに、(61) にみられるごとく、主体が特定化できないほど一般的な表現のこともある。まとめていえば、話者が関係する度合が叙実副詞より弱いといえる。

(60) It is  $\left\{ \begin{array}{c} \text{evident} \\ \text{obvious} \end{array} \right\}$  to  $\left\{ \begin{array}{c} \text{me} \\ \text{people} \end{array} \right\}$  that the uprising frightened the burghers. [D, E]

(61) It is certain (\*to me) that Frank is avoiding us. (Jackendoff 1972 : 69)

(60) は fortunately-type と類似したボタンを示しているが、つぎの点で違っている。Fortunately-type が指定する S は [+factive : +emotive] であるが、evidently-type では、その S は [-factive ; -emotive] である。

(62) (a) Evidently, the uprising frightened the burghers.

(b) The uprising frightened the burghers. evidently.

(c) That the uprising frightened the burghers is evident.

(d) The uprising frightened the burghers, it's evident. [D, E]

(63) (a) \*Not evidently, the uprising frightened the burghers.

(b) \*More evidently, the uprising frightened the burghers. [D, E]

(62a) (62b) から、この type の副詞は文頭でも文尾でも生じることがわかる。(62c) (62d) からは、

“S is A” が主なテーマで話者との関係は直接的でないことがわかる。(62d)はこの type でだけ認められる構造である。(63a) (63b)は、この type では、副詞自体の否定は認められないし、また、程度の大小を表わす修飾語はつかない、ということを示している。

表層の生起上の制約は(64)のとおりである。

(64)        ○ , NP        ○ Aux        ○? V (NP)        ? X        \* ,        ○

Aux —— V の位置は一応生じうる位置ではあるが、もし NEG が先行する場合は、副詞が NEG の作用域に入るので、この位置での生起は不可能となる。

### 3. 2. 2 Probably-type —— probably, likely, possibly, conceivably, apparently, etc.

この type は、evidently-type と同じく、指定する S の真実性を主張するのであるが、その主張のしかたに強弱の度合いが認められる。また、(65)にみられるごとく、話者の関与のしかたはまったくないか、あっても弱い。

(65) \*It is  $\left\{ \begin{array}{l} \text{probable} \\ \text{possible} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{to me} \\ \text{to people} \end{array} \right\} \text{ that the uprising frightened the burghers. [D, E]}$

(66) (a) Probably, the uprising frightened the burghers.

(b) ?The uprising frightened the burghers, probably.

(c) That the uprising frightened the burghers is probable.

(d) \*The uprising frightened the burghers, it's probable. [D, E]

(67) (a) \*Not probably, the uprising frightened the burghers.

(b) More probably, the uprising frightened the burghers. [D, E]

(66b) が?であるということは、この type が evidently-type と異なる根拠の一つである。この事実はすでに Hooper (1974) によって指摘されているが、筆者が informants D, E で調べたところつぎのような反応をえた。筆者は、evidently を含むいくつかの文を書いたカードと、probably を含む文のカードを別々に提示したのであるが、その段階では D, E は(66b) を容認した。その後、二枚のカードを同時に示して、(62b) と(66b) のどちらが自然であるかを尋ねたところ、Informant D は(66b) はよくないという反応を示した。完全に out か、という質問に対しては、完全に out とはいえないということであった。この事実はつぎのように説明できよう。(62b) の場合は、文頭でその内容を出張し、文尾に絶対主張の副詞をおいて前の主張を確認ないし、強調している。したがって、illocution 上矛盾はない。一方、(66b) の場合は、文頭で主張をし、文尾でその主張を弱めるような副詞をおいているのである種の矛盾がおこっているといえる。しかし、probably-type の副詞は程度の多少を認める副詞であるので、(66b) の probably にかなり高い probability を読み込めば容認可能性は大きくなるであろう。このことは、(68)が容認できるということから、明らかである。

(68) Many of the applicants are women, in all likelihood.

(Hooper 1974 : 94-95) (イタリックスは筆者)

(66c) (66d) についてはとくに言及すべきことはない。(67a) は、この種の副詞はそれ自体否定さ

れないこと、また、(67b) は、程度の多少を表わす修飾語と共起できること、を示している。

表層の生起上の制約は(69) (70) にみられる。

(69)           , NP        Aux        V (NP)        \* X        \* ,        ?

(70) (a)    George         $\left[ \begin{array}{c} \text{has} \\ \text{will} \end{array} \right]$          $\left[ \begin{array}{c} \text{read the book.} \\ \text{lose his mind.} \end{array} \right]$

(b)    George        will         $\left[ \begin{array}{c} \text{have} \\ \text{be} \end{array} \right]$  \*  $\left[ \begin{array}{c} \text{read the book.} \\ \text{being beaten by Bill.} \end{array} \right]$

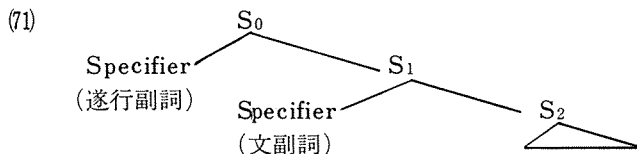
(以上二例 Jackendoff 1972 : 75—81)

(69)から、この type の副詞の位置は、文頭からVの前までといえる。しかし、V ——— またはAux ——— の部分が複合構造になっているときは(70)のような規制がある。つまり、最初の Aux の直後まではよいが、それより後の位置は本動詞の前であっても認められないことになる。

#### 4. 結 論

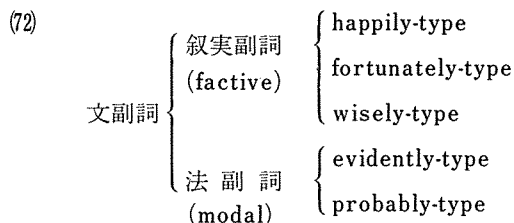
本稿で議論された主な点をまとめておこう。

(i) 遂行副詞と文副詞は(71)のような階層をなす。



(ii) 遂行副詞を含む構造に関しては(24)のような基底構造を提案した。

(iii) 本稿で扱った文副詞は(72)のように下位分類される。



(iv) 遂行副詞と文副詞の区別、文副詞の下位分類は、(73)のような項目についての検討に基づいて行われた。

(73)

|                           | 話 者 の            |      |       | 共 起 の |     |           | 可 能 性       |           |        |         |          | ± factive | ± emotive |
|---------------------------|------------------|------|-------|-------|-----|-----------|-------------|-----------|--------|---------|----------|-----------|-----------|
|                           | 遂行様式             | 心理状態 | 判断・評価 | Q     | IMP | A-ly true | That S is A | S, it's A | S, Adv | Not Adv | More Adv |           |           |
| 遂行副詞<br>Frankly-type      | +                | —    | —     | +     | — ? | —         | —           | —         | +      | —       | —        | —         | —         |
| 文<br>叙実副詞<br>Happily-type | —                | +    | —     | —     | —   | +         | —           | —         | ?      | —       | +        | +         | +         |
|                           | Fortunately-type | —    | +     | —     | —   | +         | +           | —         | +      | +       | +        | +         | +         |
| 副<br>Wisely-type          | —                | —    | +     | —     | —   | +         | —           | —         | ?      | ?       | +        | +         | +         |
| 法 副 詞<br>Evidently-type   | —                | —    | ?     | —     | —   | +         | +           | +         | +      | —       | —        | —         | —         |
|                           | Probably-type    | —    | —     | —     | —   | +         | +           | —         | ?      | —       | +        | —         | —         |

(v) (71)の階層の上下は、表層における線的構造の位置に対応し、階層の上の項目ほど、表層で外位置を占めようとする。したがって、遂行副詞と文副詞が共存するときは前者の方が後者より外側の位置を占める。典型的な外位置は、中核文の前後で、コンマで区切られた外側、また、文中でコンマで区切られた部分などである。

(vi) 本稿で扱った副詞の表層での生起の状態は(74)に示される。

(74)

|             | ① , NP | ② Aux | ③ V (NP) | ④ X | ⑤ , | ⑥  |
|-------------|--------|-------|----------|-----|-----|----|
| Frankly     | ○      |       |          | *   | *   | ○  |
| Happily     | ○      |       |          | *   | *   | ?  |
| Fortunately | ○      | ○     | ?○       | *   | *   | ○  |
| Wisely      | ○      | ○     |          | ?   | ?   | ?○ |
| Evidently   | ○      | ○     | ?○       | ?   | *   | ○  |
| Probably    | ○      | ○     | ?○       | *   | *   | ?  |

遂行副詞は典型的な外位置を占める。話者と関係が深く、主語と関係のない副詞 (frankly, happily) の一番ふつうの位置は①である。話者・主語両方に関係を持つ副詞 (fortunately, wisely) は①、②、場合によって③を占めるが、③の場合 NEG が先行するようななら不可となる。④より文尾に近い位置は文副詞のための位置ではなく、文副詞がそこにおかれた場合は、VP 副詞の解釈が与えられる。話者との関係が薄い副詞 (evidently, probably) の場合、ふつうは①②、場合によって③でも生じうる。

また、単文以外の構造における副詞の生起の規制についてはつぎのような事実がある。まず、遂行副詞の場合は、Root S の中には生じうるが、その他の埋め込み文の中には生じない。文副詞の場合は(75)のようにまとめられる。

(75)

| [+factive]の<br>that 節の中 | [-factive]の<br>that 節の中 | 制限関係詞節 | 非 制 限<br>関 係 詞 節 | Q を 含 む<br>節 の 中 |
|-------------------------|-------------------------|--------|------------------|------------------|
| *                       | ○                       | *      | ○                | *                |

以上、遂行副詞と文副詞について検討してきたのであるが、文副詞は全部を本稿で扱うことはできなかった。(1977年9月7日)

#### <註>

- ① コンマは、音韻面の超分節要素と関係するが、ここでは言及しない。
- ② [A] は、問題の文の判定を Informant A が行ったことを示す。Informant A は大阪外大の Robert P. Inglis 教授。B, C, D, E は、1977年夏、ハワイ大学で開催されたアメリカ言語学会の夏期セミナーの出席者で、B, Cはアメリカ人男性、D, Eはアメリカ人女性である。
- ③ Jackendoff (1972) の場合、これらの副詞は Speaker-oriented adverb としている。遂行副詞に入れたのは筆者の判断による。
- ④ 表中の丸印は生起例があることを示す。\*印は生起すれば非文法的と判定される場合である。?印は、何らかの問題があるか、生起例が疑わしいことを示す。印のない場所は、筆者が集めた資料の中にその生起例がなかったことを示す。

# BIBLIOGRAPHY

- Corum, Claudia (1974) : Adverbs — Long and tangled roots, CLS 10th, 90—102.
- Davison, Alice (1975) : Indirect speech acts and what to do with them, in Cole-Morgan(eds.) (1975) *Syntax and Semantics* 3, 143—186.
- Emonds, J. E. (1970) : *Root and Structure-Preserving Transformations*, IULC.
- Greenbaum, S. (1969) : *Studies in English Adverbial Usage*, Longman.
- Hooper, J. B. (1974) : On assertive predicates, in J. P. Kimball (ed.) (1965) : *Syntax and Semantics* 4.
- Huang, Shuan-Fan (1975) : *A Study of Adverbs*, Mouton.
- Huddleston, R. (1973) : Embedded performatives, *LI* 4(73), 4, 539—41.
- Jackendoff, Ray S. (1972) : *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT.
- Kiparsky-Kiparsky (1970) : Fact, in Bierwisch-Heidolph (eds.) (1970) 143—173.
- Lehrer, Adrienne (1975) : Complement-oriented adverbs, *LI* 6 (75), 3, 489—494.
- Michell, Gillian (1974) : Obviously I concede...; Performatives and sentence adverbs, CLS 10th.
- Richards, Barry (1976) : Adverbs: from a logical point of view, *Synthese* 32, 3—4, 329—372.
- Ross, John R. (1969) : On declarative sentences, in Jacobs-Rosenbaum (eds.) (1970).
- Sadock, Jerrold M. (1974) : *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*, Academic Press.
- Schreiber, P. A. (1972) : Style disjuncts and the performative analysis, *LI* 3(72) 3, 321—47.
- (1971) : Some constraints on the formation of English Sentence Adverbs, *LI* 2(71) 1, 83—101.
- 拙稿 (1977a) : 英語の副詞について、大阪外大英米研究 10.
- (1977b) : 英語の時副詞と場所副詞について、大阪外大学報 39.